櫻園通信 第28号

櫻園通信 28.
平成 27 年 10 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

出会い

大久保一翁（忠寛）　　渋沢栄一

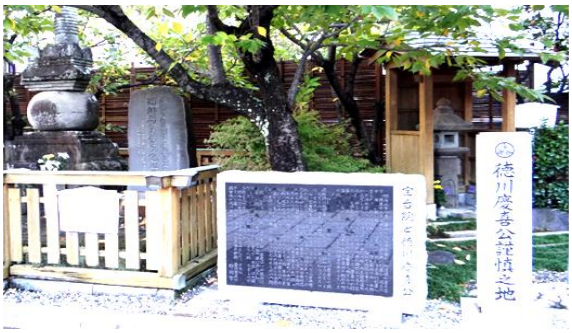
養育院を創設した大久保一翁と、それを引き継ぎ、半世紀以上にわたってその維持発展に尽力した渋沢栄一の、初めての出会いについて述べて見たい。

大久保一翁と渋沢栄一　大久保忠寛が『病院幼院設立意見』を、蕃書調所総裁として幕閣に提出したのは、安政４年（1857）41 歳の時である。黒船来航後、幕府の海防掛に抜擢され、貿易取調御用、蕃書調所総裁の立場で作ったものである。その後、直言居士の大久保は、昇任と左遷を繰り返しながら、長崎奉行（辞退）、駿府奉行、禁裏付、京都東町奉行、御側御用取次、勘定奉行（５日間）などを勤め、幕末には隠居の立場ながら（隠居名一翁）、会計総裁・若年寄として、勝海舟とともに江戸の無血開城を果たした。

維新後は、静岡藩の中老として、徳川家の移封に中心的な役割を果たした。幼い家達を後継者とし、謹慎中の慶喜家の家令の立場で、徳川家の代替わりを果たし、家臣団のための沼津兵学校、静岡学問所、駿府藩立病院の旗揚げなどに重要な役割を果たしている。

一方、安政４年頃の渋沢栄一は、秩父の豪農の倅で、血気にはやって尊皇攘夷運動に手を染め、心配した親が嫁を持たせた 17 歳の若者である。縁あって一橋家に仕えて武士身分を得、慶喜が将軍になるに及んで、26 歳の時には幕臣となり、慶喜の命で徳川昭武の幕府使節団の庶務掛として、1867～1868 年にパリを中心に、ヨーロッパ生活を体験することになる。

しかし、この間に徳川幕府は崩壊し、急遽帰国、1868 年 12 月 8 日に、徳川慶喜の謹慎する静岡に帰国報告に訪れることになる。此の場面は渋沢に自伝にしばしば述べるところである、慶喜が謹慎する駿府の宝台院の一室においてのことである。



徳川慶喜謹慎の寺、宝台院　駿府の宝台院は、徳川家康の側室、秀忠の生母である愛姫の葬られる徳川家には由緒の深い大寺で、国宝の伽藍を有した。かつて駿府町奉行を経験している大久保一翁はこの寺を慶喜の謹慎の寺に選んでいる。この間の事情が、石碑に書いてあるが、維新後、勝海舟や渋沢栄一がしばしば訪れたと言われる。

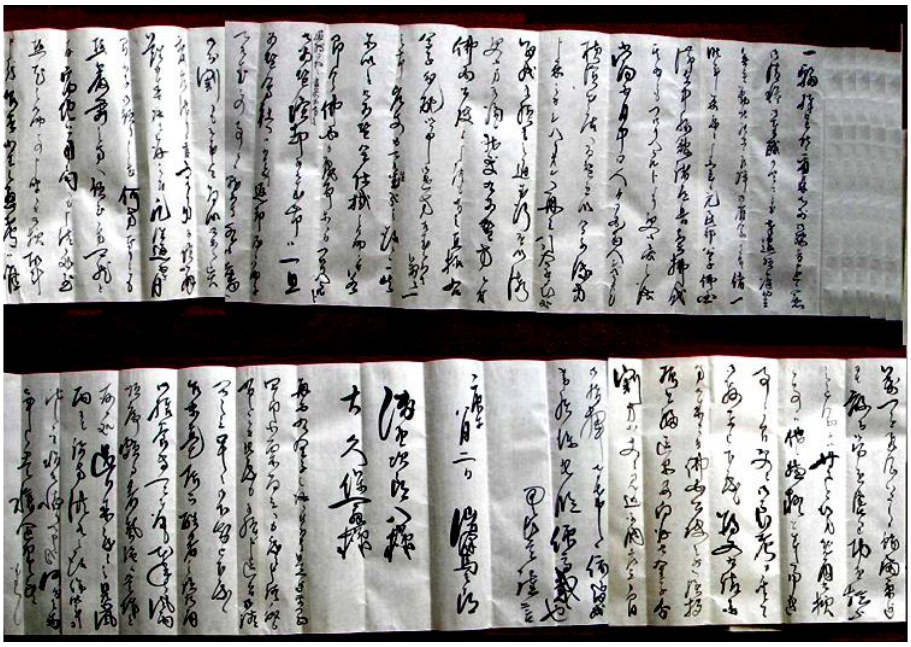
昭和 15 年の静岡大火で旧国宝の本堂を失い、さらに昭和 20 年の空襲で壊滅した。現在は鉄筋コンクリート造りの寺となっている。

大久保一翁と渋沢栄一の接点　明治元年にパリから帰朝した渋沢は、当初、慶喜に報告後、昭武のいる水戸に赴くつもりであったが、慶喜の配慮で静岡に留まり、

勘定頭支配同組頭格御勝手懸り中老手附ということになった。

このころ渋沢（篤三郎と名乗っている）が、大久保一翁・浅野次郎八に宛てた手紙が、大久保家の御子孫の家に残されている。

渋沢の流麗な筆で、パリ生活の過程で、幕府からの拝借金を運用して得た残金の処理方法について意見を求めた手紙である。詳細は次号で述べる。



当時、幕府からの使節団や留学生の、幕府からの拝領金の処理はかなりルーズであったと言われるが、渋沢のヨーロッパでの業務・会計報告の公正さは括目すべき内容であったらしい。大久保が渋沢を高く評価するきっかけとなったと思われる。

このあと大久保は、幕府から静岡藩に貸与された巨額の太政官札の運用を渋沢に任せることになる。

渋沢は、これにパリでの残金、静岡の豪商の投資などを合わせて、商法会所を立ち上げることになるが、総額の 88%は太政官札である。このように資本をあわせて（合本して）会社組織を運営したことから、これは日本最初の株式会社組織との考えがある。

かつて光岡八郎（後の由利公正）が福井藩で藩札を用いた商法会所の運営で大きな利を上げ、福井藩の財政を立て直し、藩主松平春嶽の幕末の政治活動の元となった。財政問題を抱えた明治新政府は、由利公正を財務担当とし、その手法を全国的展開したのが太政官札の発行である。しかし、信用の低下から正金への交換があちこちで行われ、その価値の維持のため、正金への交換が禁じられた。

渋沢は静岡で、太政官札の運用による「商法会所」の商業活動などで大きな利益を得たが、中央政府（由利公正）からのクレームがあり、大久保の提案で「商法会所」は「常平倉」に名を改めている。

渋沢栄一の上京　大久保忠寛は将軍家茂の御側御用の時、「日本は開国すべきで、朝廷がこれに反対するのなら、委任されている大政を奉還し、国是は諸侯の会議で決めるべき」と主張し、松平春嶽や山内容堂の度肝を抜き、慶喜、板倉勝静らには左遷された。

その 5 年後に徳川慶喜自身が大政奉還することになる。その後は慶喜を中心に、有力諸侯の松平春嶽、伊達宗城、山之内容堂、島津斉彬・久光らによる合議制、公武合体路線を想定しているのであり、維新政府が成立したとき、松平春嶽、伊達宗城らは、政府高官となっている。

明治 2 年段階で、松平春嶽ついで伊達宗城は、大蔵・内務卿の立場にあるが、これらの人は幕末から大久保一翁と親しく交わっている人であり、新政府に幕府の人材を生かそうとしてきた人である。しかしその後は、薩長閥中心の政権運営となり、表舞台から去ってゆくことになる。

渋沢栄一が明治政府に任官する過程は興味深い。

上京を命ぜられたとき拒否したが、「徳川家は人材の出し惜しみをしている」といわれては、慶喜に迷惑がかかると大久保一翁に説得されて上京している。

また上京後、大隈重信に「国家創業の八百万の神のひとりたれ」と説得され、明治政府の大蔵省に任官することになり、改正掛（シンクタンク）として維新政府の運営に貢献してゆくことになる。渋沢の明治政府への任官には、このような背景があるようである。

また後に大久保一翁が東京府知事のとき、共有金（江戸幕府からの七分積金）の運用、養育院の運営を渋沢栄一に託したのも、このような二人の信頼関係に基づくものであったろう。　〔稲松孝思〕